臼杵石仏群の意義

仲　嶺　真　信

〔I〕

もともと仏教石窟の造営は，インドに起源を持ち，仏教東漸に伴い西域経由で中国に伝播し，そこで著しく発達したものである．その中国大陸には，様々な規模の石窟群が見られる．中でも敦煌・雲崗・龍門などの大規模な石窟群は，概して北中国に集中している．その理由は，石窟造営に相応しい大規模な岩山が，その一帯に分布しているからである．ちなみにインドの場合も，西インド・デカン高原一帯の岩場の集中する場所に造営されている．

さて，いわゆる臼杵石仏群の立地についても，地理的環境から見るならば，中国やインドの条件とある程度近く，すなわち，阿蘇山噴火に起因する凝灰岩層の岩場が集中する場所に成立している．臼杵石仏群の近隣には，いまだにそれと同様の石仏造営に相応しい凝灰岩層の岩場が数多く散見される．ただし，この凝灰岩層は，石彫仏を造立するためには，決して適材というわけではない．なぜならこの凝灰岩層には，もともと亀裂や断層が多く，しかも脆い性質を伴っているからである．石材の硬・柔の性質から見て，凝灰岩は花崗岩に比べると，とても柔らかく彫刻しやすい(臼杵石仏の場合，そのことが原因で，一部においては限りなく丸彫像に近く仕上げられている)が，石材自体の持つ磨滅や亀裂の危険性から逃れることは難しい．

前述のように臼杵石仏群が，甚だしく破損・崩壊した原因は，一つは凝灰岩層の石材自体の脆弱な性質に大きく起因する．それに加えて，おそらく天災（地震）・人災（破仏）による破壊および雨風・樹根の浸蝕による自然崩壊などの災害が及んだものと見ることは許されよう．

平成5年度臼杵石仏群は，古園石仏群の修理・復元を最後に，従来から継続していた一連の復興事業が完了する．そこに至るまでは，様々な紆余曲折や逡巡があったものと考えられる．おそらく研究機関と関連行政機関，あるいはそれらの機関と大分県・臼杵市民などとの間において重ねられた，長年の努力と叡智が凝縮されているはずである．修復事業は今回を最後に終了するが，しかし，その石仏誕生の背景から石窟群全体の完了までの諸問題については，いまだに謎が多く，未解決の問題もいくつか残されている．その意味において，石仏群の全貌を解明するための研究作業は，修復事業完了と共に終わるわけではなく，いま新たな出発点に立つことができたということができよう．

このような視点に立って筆者は，拙稿において，臼杵石仏群の持つ多様な意義や問題点について概括的に指摘していくつもりでいる．なお，臼杵石仏群の草創時期あるいは開鑿順序などに関しては，慎重に綿密な考察を加えたいと考えているので，あえて本稿においては深く論及しないつもりでいる．その詳論については，後日，機が熟すれば触れることにしたい．あらかじめお断りしておくが，拙稿においては，可能性と

して推測され得るおよその年代幅を持たせて，造営年代を考えていきたい．したがって，各石仏群あるいは仏龕の造営年代については，従来の説と併せて一部私見をも呈示することにしたい．

なお，臼杵石仏群解明に際して最も焦点となるべき様式的問題については，今回は深く論及しないので，当面の考察に必要な範囲に限って，ごく簡単に臼杵石仏群の主な名称と尊像構成だけを紹介しておく．

臼杵石仏群は，地元名の(1)ホキ石仏　(2)堂ケ迫石仏　(3)山王石仏　(4)古園石仏などの諸仏・仏龕から構成されている．しかし，これらの中の(3)(4)を除く(1)(2)には，さらに別の指定名称がつけられている．つまり(1)(2)をまとめてホキ石仏群と呼び，(2)はホキ石仏第一群(第一から第四龕まで存在)，また(1)はホキ石仏第二群（第一・二龕存在）と称している．

構成内容は，現在の順路に沿って次の通りである．(あ)ホキ石仏第二群の第一龕は，九体阿弥陀と二菩薩二天部，第二龕は，阿弥陀三尊．(い)ホキ石仏第一群の第四龕は，地蔵・十王，第三龕は，大日を中尊とし，その左右に如来・菩薩各一体ずつ，第二龕は，定印如来を中尊とし，その左右に如来を各一体ずつ，第一龕は，如来三尊を中心に，その左右に菩薩を各一体ずつ．なお，第二龕と第一龕との間に愛染明王を安置．(う)山王石仏は，如来三尊．(え)古園石仏は，金剛界大日を中心とする如来・菩薩・明王・天部などの十三体の他に仁王で構成される（図1～14）．

それでは次に，臼杵石仏群の意義について，管見の及ぶ限り，まず諸課題を分析した各項目を列記し，さらにその要点を整理しながら言及していこう．

〔II〕

ここでは，まず，便宜上大きく二つに分けて考えることにする．つまり前者は，主に様式，構造・技法，年代，復元などの問題に関連して，また後者は，造営の背景，思想・信仰，造営主体（願主・檀那），荘園などの問題を中心として言及してみよう．

1．様式，年代，構造・技法，構成などを中心にして

〔1〕内容と規模からも日本で唯一の優れた石仏群

我国においては，臼杵以外に臼杵石仏群と同等の内容と規模を持つ遺跡は見られない．その特徴は次のようにまとめることができる．

(1)　畿内に起源を持つ様式の系譜

全般的に中央（南都・京仏師の流れ）の木彫仏師との関わりが強く認められ，その主流は平安から鎌倉にかけて流布したきわめて優雅な様式である．

(2)　復古的性格(一部，構造・形式の項目と重複)

裳懸座形式は中国大陸の石窟に多く見られるもので，磨崖仏（石仏）に相応しい形式である．この形式は，我国においても金銅仏・木彫仏にも採用されており，飛鳥以来の伝統を持つものである．ちなみに奈良・平安時代においても散見される．また，特に平安初期の木彫群に集中して認められる一木造特有の量塊性に富んだ特徴を持つ．あるいは翻波式が簡略化あるいは弛緩していった形式とも考えられる漣波式衣文が見られる．この形式は，鎌倉時代の他の諸作例にも認められる．

(3)　パノラマ的群像

インドや中国大陸の石窟自体が，パノラマ（変相）的群像構成になっているが，臼杵石仏群の場合も，いわゆるシルクロード上の仏跡と関連付けて考えることができる．確かに規模や迫力においては，大陸の石窟群とはいくぶん異なる．しかし日本を代表する大規模でかつ優秀な石仏群という意味においては，世界史上の石窟群の一例としても遜色はない．例えば，高松塚古墳壁画はその規模や迫力においては，中国大陸や朝鮮半島の古墳壁画に太刀打ち出来ないが，絵画作品としての品質においてはきわめて優秀な作例であるということができる．つまり規模や迫力という点においては，日本に比べ大陸の方が遙かに勝っているが，芸術性という点においては，日本は決して劣っていないのである．臼杵石仏群は，大陸的水準においては小規模ではあるが，日本においては大規模であり，しかも比類すべき例が他にないのである．なお，建造物としての覆屋が伴っていたことが判明しているが，これは中国の石窟構造に類似するものと考えられる．

(4)　多様な仏像の種類

如来，菩薩，天部，明王などの各部にわたって豊富な仏像群が見られる．珍しい例として，石仏の愛染明王が知られる．その手に磨滅はしているが，愛染明王と特定でき得る弓が持物として握られている．具体的な尊名の特定は，そのもの自体が崩壊・磨滅しているため，判別が不可能な場合もあり，あるいは即断が難しい状況にある．

(5)　密教と浄土教との融合（信仰の項目と一部重複）

阿弥陀，観音，普賢，大日，不動明王，愛染明王，梵字，五輪塔などから密教と浄土教との融合が窺える．院政期から鎌倉にかけての慈円は，天下国家の祈りは，釈迦・大日へ捧げ，一方，自己の生命は，阿弥陀仏に托すという二本立であった．彼は顕密の熱心な唱導者でありながら，自行としては念仏に委ね往生を托している．つまり，釈迦・大日・弥陀の間は，はやく叡山において会通していたことが知られる①．一方，平岡定海氏によると，法華経＝極楽往生＝弥勒下生と連なる思想は，空海の大日＝弥勒＝大師＝弥勒下生とも共通する②．つまり，密厳浄土即西方浄土，あるいは大日即阿弥陀という関連が考えられる．

以上のことは，臼杵石仏群の場合にも該当するものと考えられ，さらに地蔵・十王信仰との関係も確認される．なお，半跏形式の地蔵の登場は，平安後期(11世紀)，地蔵・十王図は，鎌倉に始まる．

(6)　曼荼羅的配置（信仰の項目と一部重複）

特に，古園十三体石仏群の配置は，尊名がまだ不明なものもあるが，智拳印の大日如来を中心とする金剛界曼荼羅的配置を基本に採用したものと考えられる．一部においては，尊勝曼荼羅の配置からの影響説もあるが，まだまだ徹底的に解明されてはいない③．しかし，いずれにしても，曼荼羅的配置を基本としている点は共通している．なお，臼杵市門前の大日石仏群の配置が，中央に定印・大日を安置しているので，胎蔵界大日を中心する配置と見ることができる．もしそうであるならば，古園石仏群と門前の大日石

仏群との配置には，金・胎の両界曼荼羅的発想が潜んでいるものと推測される．

〔2〕構造や技法の特徴

(1) 木彫仏師系の丸彫的造形

すでに指摘したように臼杵石仏群には，木彫系仏師の活躍が窺われる．技法的には，木彫特有の割矧法が採用されている．しかも彫刻素材となる柔らかい凝灰岩の石質の特性から，一部においては丸彫に近い仕上げを施している．例えば，古園大日や多聞天像（内刳をも採用）などはその典型である．

(2) 裳懸座形式

大陸の石窟に多い裳懸座形式は，地元名のホキ石仏群（指定名称：ホキ石仏第二群），堂ケ迫石仏群（指定名称：ホキ石仏第一群）に顕著に見られ，山王石仏にも採用されていたものと推測される．特にホキ石仏第一群のほとんどはこの形式であり，奈良期の復古的性格をいくぶん秘めつつ，当時の流行や好みが反映されている．裳懸座の下部に見られる円や方形の孔跡は，経典や法具などを奉納するための装置で，末法思想と緊密な弥勒信仰に関わるものである．

(3) 量塊性および漣波式衣文

前述した復古的性格と関わる問題でもあり，この量塊性は平安初期木彫群に特有な特徴であるが，ホキ石仏第二群第一龕の阿弥陀三尊，山王石仏，古園石仏などに典型的に見られる．一方，漣波式衣文の形式は，特に九体阿弥陀などの立像に顕著である．

(4) 彩色

古園石仏群やホキ石仏群（指定名称）などには，特に朱色が目立って残っている．酸化第二鉄（ベンガラ）もしくは，水銀朱（辰砂）などを顔料にしたものと推定される．

(5) 覆屋形式

草創当初，臼杵石仏群は，全体的に大陸の石窟構造に見られるような，かなりの奥行を持った洞窟空間における安置法を採用していなかったがため，諸仏が風雨に晒される状況にあったと推測される．しかし，まもなく，仏像群を風水などから保護すると同時に礼拝施設を確保するために，覆屋が建立されたものと考えられる．この覆屋形式は，大陸の石窟寺院の構成に近い．したがって，考古学的に確認された鎌倉の建久年間を示す出土瓦の問題については，慎重に考える必要がある．つまり，ただちに石仏群の草創年代に直結させて考えることは避けたい．蓋然性として，瓦葺の建物以前に茅葺もしくは板葺のそれが建立されていた可能性も想定される④．

〔3〕仏像断片の再生・総合（復元）から，本来の実像に近づけることが可能

幸いにも臼杵石仏群は，復元作業を行うに際して，仏像体軀の部分断片や遺品が多少残されているので，これらをもとにある程度の復元・修復作業が可能である．復元の意義は，次の(1)に掲げた諸点にある．

(1) 本来の全体像は，いくつもの断片部分の総合化によって，初めて実像が判明し，同時に学術研究に大いに寄与する．

a．儀軌に基づき尊名が特定できる．
例：金剛界大日（智拳印）愛染明王（火焔光，弓）不動（火焔光，利剣，眇，弁髪）

b．構造や構成が判明する（内刳，割矧）．

c．様式とその系譜が判明する（主に院政

期以降の仏像との関連).

なお，具体的に臼杵石仏群全体の研究を行うには，次の(2)の課題を検討する必要がある.

(2) 類似する他の作例との比較検討から，尊名・構造・様式を究明する.

したがって，臼杵石仏群がいくつかの段階を経て現状の規模に造営・整備されて行ったと想定して考える場合，その草創年代や何期かに分かれたものと推測される造営問題についても，例えば，以下の基準作例として最も重視すべき諸仏像との様式を比較検討することが前提条件となる.

1．仁和寺阿弥陀三尊像……仁和四(888)年，定印阿弥陀最古
2．慈尊院弥勒仏坐像……寛平四(892)年
3．岩船寺阿弥陀坐像……天暦九(946)年
4．興福寺薬師坐像……長和二(1013)年
5．平等院阿弥陀坐像……天喜元(1053)年，定朝
6．浄瑠璃寺九体阿弥陀坐像……永承二(1047)年／保元二(1107)年
7．大分岩屋寺および元町石仏……永承元(1046)年頃～⑤
8．仁和寺薬師坐像……康和五(1103)年，裳懸
9．法界寺阿弥陀坐像(11世紀～12世紀，定朝様)
10．法金剛院阿弥陀坐像……大治五(1130)年
11．鳥取大山寺阿弥陀三尊像……天承元(1131)年，裳懸
12．京都三千院阿弥陀三尊像……久安四(1148)年，裳懸
13．高野山霊宝館大日坐像……天養元(1144)年－久安四(1148)年，旧金剛心院，裳懸
14．長岳寺阿弥陀三尊坐像……仁平元(1151)年
15．峰定寺千手観音坐像……久寿元(1154)年
16．奈良円成寺大日坐像……安元元(1175)年，運慶
17．岐阜横蔵寺大日坐像……寿永二(1183)年，仏師筑前講師
18．大阪法道寺阿弥陀坐像……平安後期，八角裳懸
19．願成就院阿弥陀坐像……文治二(1186)年，運慶／浄楽寺阿弥陀坐像……文治五(1189)年，運慶
20．大野郡三重町菅生石仏／大野郡緒方町宮迫東西石仏
21．中尊寺金色堂創建……天治元(1124)年，藤原清衡(？-1128)，基衡(？-1157)，秀衡(？-1187)

なお，臼杵石仏群の草創年代に関して従来，藤末鎌初という年代が通説として示されている．いわゆる「藤末鎌初」という年代は，中尾五輪塔や建久年間の瓦などの傍証資料を根拠にしている．しかし，管見によると，確かに一面においては間違いではないが，厳密に考えるならば，その年代はいくつかあったものと想定される造営段階の一造営期として考慮すべきではないだろうか．慎重を期するならば，ある程度，年代に幅を持たせて，草創・造営の問題を考察する心構えが必

要であろう．なお，古園石仏の造営開始に関して，中野幡能氏は寛仁三（1019）年頃としている⑥．筆者は，草創・造営などの問題については，別稿を用意するつもりでいるので，詳しくは今後に譲る．

〔4〕石塔などの傍証資料から造営年代が推測可能，さらに経塚（弥勒浄土信仰）遺構としても有意義

中尾五輪塔（聖塔）として嘉応弐（1170）年銘大塔と承安二（1172）年銘小塔が有名である（図15）．後者には「千部如法経遍照金剛□□……」と銘文が梵字と共に刻まれている．五輪塔草創期の貴重な作例に挙げられるもので，一石で造立されている．ちなみに承安銘塔に似た一石・五輪塔一基が日吉社境内からも発見されている⑦．もともと五輪塔信仰は，覚鑁（1095-1143）によって始められたもので，彼は密教と専修念仏の一致を説いた．弥勒信仰とも関わるこの五輪塔は，密教では大日の三昧耶形でもあるので，ホキ石仏第一群に見られる裳懸座下の埋経用の孔跡はもちろんのこと，その第三龕（指定名称）の大日との密接な関連に注目すべきである．この埋経は，道長の金峰山における『法華経』『阿弥陀経』『弥勒経』などを銅筒に奉納して地中に埋めた例が有名であり，末法の世に，仏法破壊をおそれ，来世の弥勒到来のために『法華経』などの経典を地中および仏像体内などに奉納したことを意味する．

中尾五輪塔・銘文に確認されるいわゆる「如法経」（『法華経』）の埋経は藤原中期以降，比叡山・横川に始まるもので，法華経は，浄土教の発達とあいまって普及・発展し，平安貴族社会の教養として珍重された．当時，六波羅蜜寺の空也上人に代表されるような「如法経聖」と称される遊行僧たちが諸国を勧進しながら造寺・造仏・造塔などの作善を行っていた．彼等は，持経者として既存教団から離れた「聖」という存在であった．特に高野山再興期において，高野山の浄土教形成の主体であった興福寺系の聖の活躍が知られる⑧．中尾五輪塔が，聖塔という伝承を持つ由来も，この「聖」による地方における勧進活動との関わりを示す．この浄土を志向して念仏，読誦に勤しむ「聖」の中でも，特に『法華経』の読誦，講経，書写などに専念した者を持経者と呼んでいた．

ところで『法華経』巻七・普賢菩薩勧発品において，下記のことが記されている．すなわち，

「法華経を書写するだけで，その人は命終るのち，忉利天上に生ずることができる．そのとき，八万四千の天女は，もろもろの伎楽をかなでて来迎する．その人は七宝の冠をつけて，婇女たちの中で娯楽快楽することができる．もし『法華経』を受持・読誦し，その経義を解する人は，命終るのち，千仏に手をひかれ，恐怖せず，悪趣におちず，兜率天上の弥勒菩薩の所に往く．弥勒菩薩は，三十二にも及ぶ他にすぐれた姿かたちがあり，大菩薩がそのまわりを囲み，百千万億の天女と眷属がいるが，その中に生ずることができる．（傍線筆者）」と，兜率天上生思想を述べている⑨．したがって中尾五輪塔は，すでに法華経信仰中に融合している兜率天上生思想と密接に関わるものと解釈することができる．残念ながら造立者名が判明しないが，銘文中には「阿闍梨某」の部分のみ判読できる．ちなみに現在，満月寺前に安置されている鎌倉末の正和四

(1315) 年銘の石塔には，阿闍梨隆尊が師・尊全および亡父のために造立した旨が記されている．この両石塔銘からは，臼杵における各時代の阿闍梨たちの活躍が窺えるので，石仏造立に際しても彼等が関与した可能性が高い．銘文中の嘉応弐 (1170) 年と承安二 (1172) 年から，五輪塔造立の年代は判明するが，これらはただちに臼杵石仏群の草創年代を示すことにはならない．あくまでもその傍証資料として考慮すべきであると筆者は考えている．この他に，満月寺脇に鎌倉期と推測される日吉宝篋印塔(重文，図16) がある．

〔5〕発掘遺品から，建物の造営年代とその様子がうかがえる

古園大日基壇下から12世紀の土師器が，また石仏一帯から宇佐弥勒寺(建久三1195年，建仁三1203年火災) と同じ鎌倉初期瓦が出土．鎌倉期の礎石も出土しているが，これは覆屋 (礼拝施設) の遺構である．なお，当初は瓦葺ではなく，板葺，萱葺などであった可能性が考えられる．

2．造営の背景，信仰，造営主体 (願主・檀那)，荘園などについて

〔1〕当時の思想と信仰

(1)　浄土信仰

臼杵石仏群中には，阿弥陀三尊(ホキ石仏第二群第一龕) と九体の阿弥陀 (ホキ石仏第二群第二龕)があることから，源信の『往生要集』(永観二984年)によって説かれた阿弥陀および九品往生思想との関わりが窺える．井上光貞氏によると，阿弥陀堂建築は，藤原中期の寛仁四 (1020) 年・道長の法成寺無量寿院に始まり，平等院に代表される藤原後期 (1030-1086)，白河院政期 (1095-1127)，鳥羽院政期 (1129-1154)，六波羅時代 (1156-1179)，鎌倉初期 (1185-1219)あたりまで数多く見られる．その中で盛行期は，院政期であること．また建立者は，貴族以外にも武士階級，換言すれば，経済上の余力のある者が，競って造立に参加していることに注目すべきである[10]．藤原期の栄華を極めた道長 (996-1027)は，寛弘四(1007)年金峰山において，密厳浄土・弥勒浄土との思念をこめて経筒を埋納している．その銘に「臨終時，心身散乱せず弥陀尊を念じ，極楽世界に往生す」と記す．これはあらゆる浄土の総合，その象徴としての弥陀信仰であるという[11]．1086年白河天皇退位後から1185年平家滅亡までは，院が政治権力を掌握していた院政期であるが，それ以後は武家の牽制下にあった．当時，慈円の『愚管抄』は，「保元 (1156) 以降の事は皆乱世」といい，またその兄・兼実の『玉葉』や定家の『明月記』などは，「乱世」「乱代」と記す．当時は，不安と混乱の激動期であり，自ずからこの世の権門の人達は，競って神仏の加護を強く求めて，寺社の造営に励んだ．

(2)　神仏習合との関連

日吉山王権現は，大山咋神を主祭神とする山岳信仰が源流であるが，最澄の時，大三輪神を山上に祀り，大比叡神とし，元来の比叡山の神大山咋神は山下に移した．その信仰は，神仏習合により天台宗の隆盛と共に山王権現として飛躍的に発展した．中世に上七社，中七社，下七社となり，合わせて「山王二十一社」とした．特に上七社のうち，大宮 (大比叡)・二宮 (小比叡)・聖真子は山王三所として

最も崇敬された[12]．平安時代に，荒法師たちが，日吉山王社の神輿を担いで朝廷に強訴を頻繁に行ったり，寺院同志で争ったことは，つとに有名である．神仏習合の立場から，大宮（大比叡）の本地を釈迦，二宮（小比叡）の本地を薬師，聖真子（宇佐宮）の本地を阿弥陀とし，以上の三つは山王三所（三聖）という．臼杵・山王石仏の場合，三尊形式の安置であり，中尊は薬師，右脇は阿弥陀，左脇は釈迦と推測される．ちなみに，真言ではニュウズヒメ（丹生都比売）は金・胎の大日，山王として祀り高位につけたという[13]．丹生都比売とは，丹生が水銀（朱砂，辰砂）を示すので，それに関わる女神のことで，それを祠った場所が山王社である．もともと，丹生は水銀製造や赤色顔料の主要な鉱石．臼杵は，旧名が丹生荘であり，その領主が臼杵氏であったので，今後その名実の因果関係を深く追及する必要がある．

ところで，古園石仏群遺跡からは，宇佐弥勒寺で使用されていたものと同タイプの鎌倉初期と推定される軒瓦が出土していることから，天台密教もしくは宇佐八幡との関連が窺われる．鳥羽院（1129-58）の前の頃から養和元（1181）までは，弥勒寺由原宮大宮司は大神氏になっているが，大神三重氏は同時に臼杵氏（海部郡臼杵庄の開発領主）でもあるという．三重蓮城寺・臼杵荘満月寺（蓮城開基）に関する創建説話も，天台寺院の助力の下に，臼杵惟盛ら大神氏一族が八幡信仰を拡大しようとした意図のあらわれであると指摘されていたが[14]，どうやら，臼杵大神氏と宇佐大神氏とは，直接の関わりは薄いようである[15]．なお，大野川流域の石仏や寺には，大分市元町石仏と同様に，一部日羅伝承が見られる．

(3)　密教修法

密教仏や梵字などが存在することから，臼杵石仏群においても密教修法が行われていたものと推測される．なお密教修法の代表的なものには，次のものが知られている．

①　息災法（外的な災難・障害や煩悩・罪障を除くため，滅罪生善・浄除業障・祈雨）

②　増益法（世間的な幸福や修行上の福徳を増進．求子・出産・延命・幸福）

③　調伏法（怨敵などの災難を打破，自他の煩悩を砕く．道長は，長和元（1012）年，敵を倒し後顧の憂いを消すため五大明王を造立．これは現世的祈禱的密教信仰と指摘されている[16]．）

④　敬愛法（親睦や尊敬を得ることを祈る）

〔2〕造仏の背景・外護者（檀那）など

本来仏像は信仰の所産であり，造仏の背景には，寺院の経済的後援者あるいは特定寺社や参詣者などからなる檀那，および造寺，造塔，造像，写経，布施などを行う願主などが存在する．臼杵石仏群の場合，前述の石塔銘中の阿闍梨たちは，いわゆる願主に最も相応しい存在といえよう．一方，外護者としての檀那には，豊後大神氏（初代惟基の11世紀半ばの時代には，阿南，稙田，大野，緒方の各姓を名乗った緒方惟盛の系統で，臼杵惟茂，その子惟隆，弟惟栄など）が該当する蓋然性がきわめて高い[17]．ちなみに11世紀半ば，大神氏は宇佐大宮司職から排除され，豊後に勢力を扶殖していった．その大神氏が由原宮（弥勒寺別宮）と国衙の勢力を利用し，豊後の郡司・郷司職（律令末端機構）を獲得（在地領主化）した．由原宮造立以後，六郷満山の

「人聞菩薩」に対して，弥勒寺由原宮の神職社僧に大宮司大神氏系を配し，そこから日羅，蓮城信仰が生じたというが[18]，近年この説には批判が呈示されている[19]．

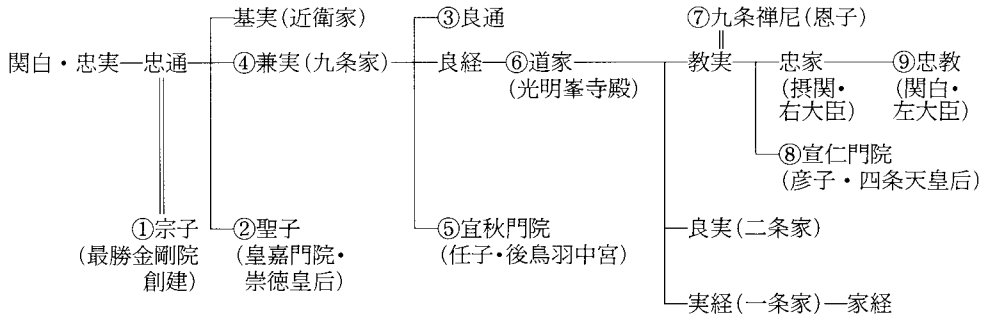
〔3〕**荘園の問題との関連**

当時の荘園制から考えると，臼杵庄は丹生郷に成立した荘であり，その在地領主は，大神臼杵氏であるという[20]．また，臼杵荘と摂関家との関係を通して見ると，康治二(1143)年から久安五(1149)年にかけて豊後国司(遙任)の職にあった源朝臣季兼の意向・仲介で，藤原忠通(1097-1164)の妻・宗子が建立した最勝金剛院に臼杵荘を寄進しているものと推測される．その後，宗子からその娘(崇徳皇后＝嘉福門院聖子)を経て，1180年には摂関家の九条兼実(1149-1207)へ，さらに1204年には兼実からその娘(後鳥羽皇后＝宣秋門院任子)へと渡っている[21]．九条家は造寺・造仏にも深い関わりを持つ名門の家柄であり，兼実の孫・道家(1193-1252)は，禅刹・東福寺を建立しており，前述の通り臼杵荘との緊密な関わりを保っている．したがって，臼杵石仏群造営の背景にも藤原摂関家との何らかの積極的な関わりを想定することは許されよう．

ところで，藤原期の豊後国司との関わりを想定する上で，特に藤原頼輔には注目すべきである．なぜなら，永暦元(1160)年豊後守に任官された頼輔は，仁安元(1166)年から元暦元(1184)年までの間，豊後国知行国主(遙任国司)の任にあったからである．この在任期間は臼杵・中尾五輪塔銘の示す年代と重なることから，ある時期の臼杵石仏群の造営に，この頼輔が深く関わった可能性があるとする説も示されている．また，きわめて重要なことであるが，源頼朝が，藤原季光が豊後守として在任していた期間中の知行国主となっている事実に注目すべきである．ちなみに，文治元(1185)年に行家・義経の謀反に同意した豊後国を知行国にする申請をし，翌年認可されている[22]．

以上の事柄からもある程度推察されるように，臼杵石仏群造営の時期については，第一に様式の問題を踏まえることはもちろんのこと，第二に臼杵荘の在地領主・臼杵氏の勢力拡張の問題，また同時に，あるいは豊後における国衙および国司との何らかの関連をも実証的に追究する必要がある．

＊参考までに臼杵に関わると考えられる摂関家の系図を簡略に示しておく(数字は伝領順序[23])．



〔4〕「臼杵および丹生」名との関係（神仏習合の項と一部重複）

ところで，朱砂（辰砂）を酸化（酸化材料は木炭）させると，水銀が採取できることは古来知られていた．ちなみに，水銀製造に従事した一族のことを丹生氏と呼び，この氏族の祭神（水銀の神様）をニュウズヒメ（丹生都比売）と称した．また，すでに触れた通り，真言一派ではニュウズヒメを金・胎の大日とし，山王として祀り，高位につけたという．

ここで，地名（丹生郷）と産物（朱砂）との関わりを『豊後国風土記』によって確認して見よう．丹生郷について次のように記されている．つまり「丹生郷在郡西，昔時之人取此山朱，該朱沙，因日丹生郷」[24]．つぎに，『続日本紀』の文武二（698）年九月の条には，「常陸，備前，伊予，日向は朱沙．豊後は真朱（まほそ）を献上した」ことが記されている[25]．さらに『東大寺要録』によると東大寺大仏造立の際，銅，錫，金などと共に，水銀58,620両，炭18,656両が使われたことが明らかであるが[26]，さらに鍍金には，水銀アマルガム法で金銅仏に仕上るために水銀と金が使用されている．金銅仏の鋳造過程および鍍金に際しても，炭は重要な火力として使用されていることに注目すべきである．

以上の事柄を踏まえて考えると，水銀と炭との関わりを無視することはできない．なぜなら，臼杵には「炭焼小五郎」の名で知られた真名長者の仏像建立伝説があるからである．例えば，臼杵石仏群以外にも，この真名長者が造仏・造寺に関わったとする伝承に，般若寺（山口柳井市，高麗僧慧慈開山）や太山寺（伊予高浜，深田の樟で仏堂建立）などがある[27]．

とまれ，造仏事業には，金・銅・水銀などはきわめて大切な素材である．特に丹生（水銀，朱砂）は，例えば敦煌石窟においては，壁画の顔料として，あるいは日本においては朱塗の柱や鳥居，さらに装飾古墳などにも採用された貴重なものである．一般的に，造寺・造仏などの荘厳の際に，金・銀・銅・水銀などの鉱物素材は重宝されたということに注目する必要がある．

すでに指摘されていることであるが，臼杵庄は丹生郷に成立した荘であり，その在地領主は大神臼杵氏であった．とすれば，造仏事業に際しての経済的な支援に，この大神臼杵氏が密接に関わった可能性はきわめて高い．例えば，丹生の生産・製造作業に，大神臼杵氏が従事していた可能性も推測される．一方，豊後大神氏の遠祖は大和大神氏であったとの説もあるので，ますます，山王社（大三輪神＝大比叡）との関連をも無視することはできない．つまり，宇佐神宮との関わりが深ければ，おそらく八幡社が臼杵石仏群の丘の上に勧請されたはずであるのに，なぜ山王信仰であったのかを検討しなければならない[28]．

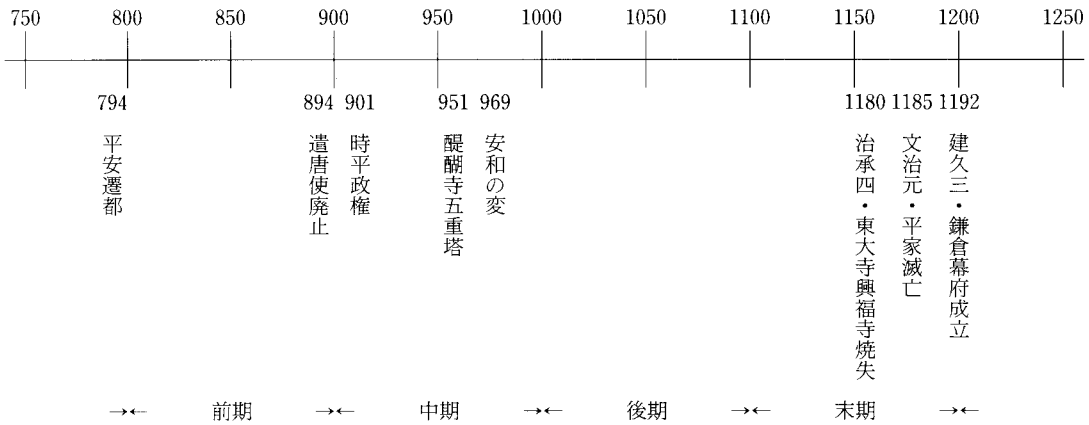
〔III〕

以上，前章において臼杵石仏群の意義について，いくつか項目を設けて，その要点について簡単に述べてきたが，いまだ具体的に解明されない問題も少なくない．拙稿においては，深く論究せず漠然と触れただけで，あえて明言を避けてきた問題もある．今回は，石仏群の意義を中心にして，概観的に鳥瞰することに徹してみた．したがって，今後の課題として残された問

題もいくつかある．まず，臼杵石仏群に関する造営の始終を考察する上で重要な課題とすべき「想定され得るいくつかの造営段階」についての具体的な考察．これについて，筆者は他日稿を改めて言及するつもりでいる．ただし，最初にも触れたように，仏像様式の問題と造営年代の関係については，筆者は，その年代を平安から鎌倉という年代幅を大きく持たせて取り扱うことが大切であると考えている．

なぜならば，例えば日本彫刻史においては，仁平元（1151）年銘・長岳寺・阿弥陀三尊像を鎌倉様式の萌芽と見る立場があるが，もし，そのように理解するならば，中尾・五輪塔の示す年代(1170，1172)に臼杵石仏群の草創の根拠を置くことは，すでに仏像の鎌倉様式が始まっていると解釈することもできる．一方，通用の政治史にしたがって，平家が滅亡した文治元（1185）年以降，あるいは鎌倉幕府成立以後を鎌倉というならば，中尾・五輪塔の示す年代は，まだ藤原末期である．臼杵石仏群造営に関して従来，いわゆる「藤末鎌初」という表現を採用していた理由は，前述のように，時代区分の根拠が異なる場合においても，ぼかした表現ではあるが両者を包括することが可能であり，一面においては便利であるからと考えられる．しかし，包括的な表現であるということは，同時に曖昧で不便でもあるということを認識しなければならない．

ともあれ，いずれの時代にせよ平安時代も，ある程度具体的に考えていく場合，年代の細分化を図る必要がある．つまり，前期，中期，後期，末期などと分けて考えていく必要があろう[29]．例えば，厳密ではないが筆者は，100年単位の期間を目安に四期に区分する方法を便宜的に使用したいと考えている．しかし，その適用については，慎重に今後検討を要するべき重要な課題である．ただし，仮に四期区分法に基づくならば，臼杵石仏群の様式的系譜を辿る上では，「基準作例」を設定する場合，平安末期だけではなく，おそらく中期，後期制作の諸仏像との関係についても考察の対象の輪を広げる必要があろう．その意味で本稿の性質を考慮して，あえてここでは平安から鎌倉という年代幅をゆるやかに設定しておく必要があると考える（参考図：時代区分）．



ところで，すでに前章において言及した事柄からも，ある程度推察されるように，臼杵石仏群に関する諸問題を解明するためには，つぎの諸問題に焦点を当てることが大切である．

第一に仏像の様式とその系譜（様式，作者：仏師）および造仏の背景となる思想や信仰（密教，浄土教，神仏習合など）の問題について追及する必要がある．もちろん，様式系譜や仏教思想以外にも，第二として造営を支えた願主・檀那（貴族，武士，僧侶，在俗など）の問題，さらに第二とも一部関連することであるが，第三として，政治経済的背景を探る意味で，特に荘園の問題，すなわち，臼杵荘の在地領主・臼杵氏の勢力拡張の問題，また同時に，臼杵石仏群と国衙および国司との関連をも実証的に追究する必要がある．

今，これらの諸課題を解決するための十分な資料を持ち合わせていないこと，および，解明作業に十分な時間を必要としなければならないために，詳論に及ばなかったことは大変残念である．他日を期したい．

注

① 多賀宗隼『慈円』吉川弘文館　平成元年　p.189-191.

② 平岡定海『日本弥勒浄土思想展開史の研究』大蔵出版　1977年 p.124

③ 中野幡能氏は，「国東・臼杵の磨崖仏と修験道文化」（『山岳宗教史研究叢書15　修験道の美術・芸能・文学（II）』名著出版　昭和56年・所収）において，望月友善「豊後の磨崖仏とその周辺」（『日本の石仏』太陽社　昭和55年・所収）について触れ，その説を紹介している．

④ 賀川光夫「臼杵石仏造顕の背景」（『史学論叢　第15号』所収）別府大学史学研究会　1984年・参照

⑤ 『宇佐大鏡』によると，岩屋寺前勝津留畠は「宇佐宮毎年万燈会勤修御燈油料」とあり，万燈会は天喜年中（1053-58）に始まる．『大分県史　古代編II』昭和59年　p.247. p.553.
中野幡能「豊後の磨崖仏をめぐる諸問題」（『日本歴史　第266号』吉川弘文館 1970年・所収）参照．

⑥ 中野「豊後の磨崖仏をめぐる諸問題」参照

⑦ 谷口鉄雄『臼杵石仏』中央公論美術出版　昭和51年 p.27.なお，中尾五輪塔の先蹤をなす中尊寺釈迦院五輪塔（凝灰岩）は，仁安四（1169）年銘を持ち，日本における在銘最古の例として有名である．五輪塔と関わる臼杵石仏群の造営問題との比較検討が必要である．

⑧ 『井上光貞著作集　第七巻　日本浄土教成立史の研究』岩波書店　1985年　p.234-239.

⑨ 『アジア仏教史　日本編II　平安仏教』佼成出版社　昭和52年　p.298-299.

⑩ 井上光貞前掲書 p.194-203.

⑪ 村山修一『浄土芸術と阿弥陀信仰』至文堂　昭和41年　p.83

⑫ 『仏教事典』小学館　1988年　p.359.参照

⑬ 『臼杵石仏地域の民俗』臼杵市教員委員会　昭和53年　p.81.

⑭ 中野「豊後の磨崖仏をめぐる諸問題」参照．中野幡能『大分の歴史・第二巻　宇佐八幡と石仏』p.430.

⑮ 渡辺澄夫『源平の雄　緒方三郎惟栄』第一法規出版　昭和56年　p.35-46.．『大分県史　古代編II』p.414.

⑯ 村山修一前掲書　p.83

⑰ 渡辺前掲書　p.49-67.　『大分県史　古代編II』p.422-424.『臼杵市史（下）』第一法規出版　平成四年 p.13.-14.

⑱ 中野「豊後の磨崖仏をめぐる諸問題」参照．中野『大分の歴史・第二巻』p.430.,p.436.
渡辺前掲書　p.36.,p.39.

⑲ 渡辺前掲書　p.35-46.

⑳ 渡辺前掲書　p.44.『大分県史　古代編II』p.424.

㉑ 源朝臣季兼は，康治二（1143）から久安五年（1149）まで豊後守（但し遙任国司）．久安五年以降対馬守へ転任．摂関家の家司．遙任国司を歴任し収入をふやすとともに，荘官としての収入があり，当時の貴族の典型的な姿と考えられる．（『大分県史　古代編II』p.391-392.参照）．新川登亀男「豊後守源季兼論」（『九州中世社会の研究』渡辺澄夫先生古稀記念事業会・所収）参照

㉒ 『大分県史　古代編II』p.396.

㉓ 『大分県史　古代編II』p.188.参照

㉔ 『豊後国荘園公領史料集成・六』（別府大学附属図書館　平成三年）所収

㉕ 『続日本紀・前篇』吉川弘文館　p.3

㉖ 『東大寺要録』巻第二（醍醐寺本），縁起章第二・大仏殿碑文.（編纂・校訂・筒井英俊，著作権者・筒井寛秀，国書刊行会，昭和46年，p.35.）

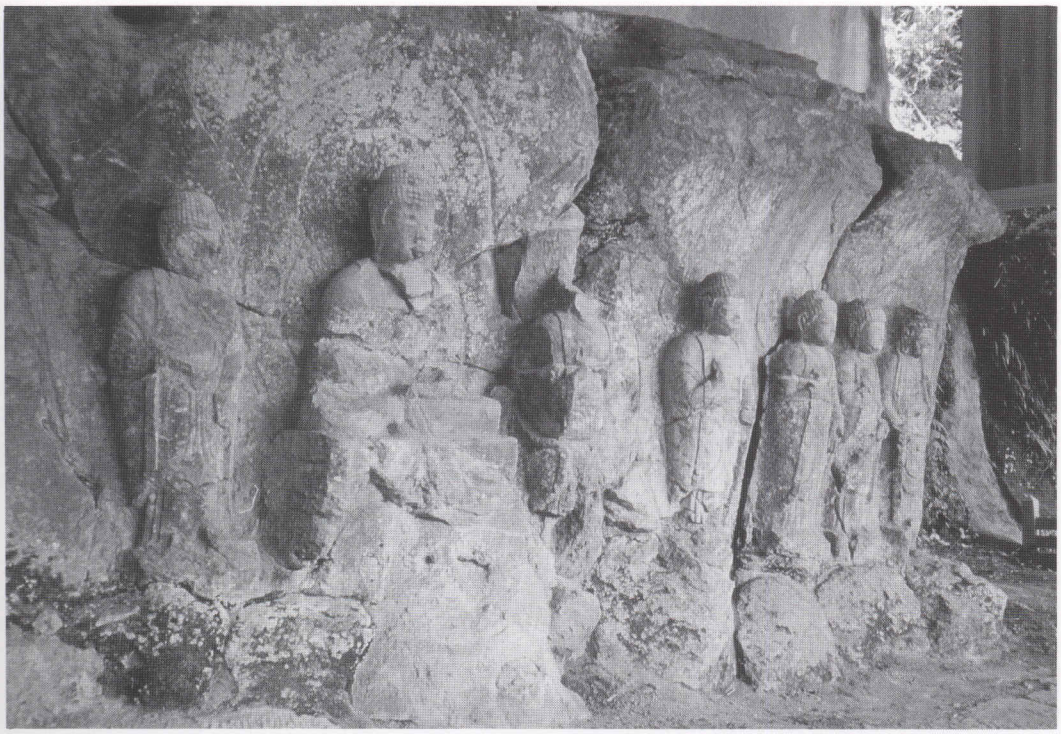
㉗ 四国霊所52番札所・太山寺は，孝謙天皇の勅願寺であり，後三条，堀河，鳥羽，崇徳，近衛などの歴代天皇の祈願になる十一面観音像が6体安置されている．長者堂には，豊後とも深く関わる蓮城法師，真野長者の肖像もあり，本堂（国宝）は鎌倉期の密教建築である．なお，山口・般若寺にも真野長者夫妻の墓と肖像がある．大分県三重町蓮城寺宝塔には，永仁四（1296）年および「大仏師」銘があり，様式は畿内のそれに近い．

㉘ 渡辺前掲書　p.33-44.『大分県史　古代編II』p.414．なお，臼杵石仏群草創の問題について，佐和隆研氏は次のように示唆に富む指摘をしている．「例えば，臼杵石仏は日吉神社のある丘の下とそれに対する丘の側面に彫りつけている．すなわちこれらの石仏は，日吉神社を背景とする天台系の人達が，日吉山王信仰を示すとともに天台密教系の信仰をもとにして，磨崖仏を彫りつけたのがはじめではないかと考えられてくる．そのように考えられてくるとするならば，この地の寺院はこの石仏を中心として坊が発展したものかも知れない．」と．佐和隆研「日本の磨崖石仏」（『日本の仏教美術』三麗社　昭和54年・所収）p.358.

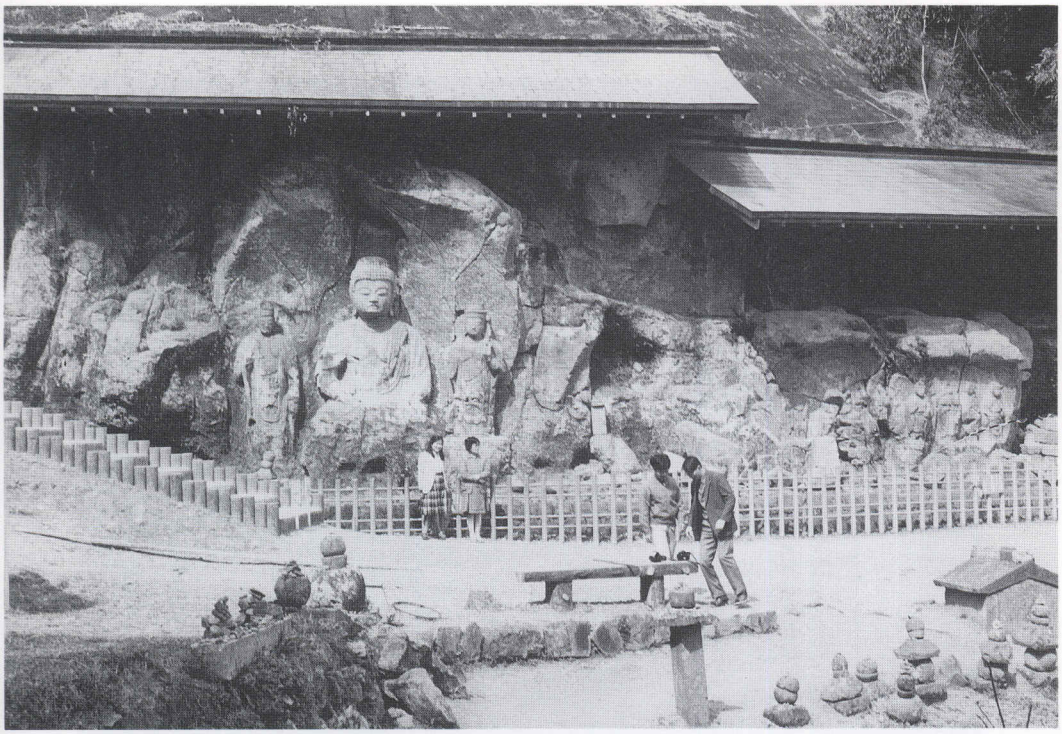
㉙ 現在，日本美術史においては，通常，平安時代は，前期と後期に区分している．その境については諸説あるので，参考までに次に示しておく．
つまり，①遣唐使廃止の寛平六（894）年，②菅原道真左遷後の藤原時平の政権が確立した延喜元（901）年，③醍醐寺五重塔造立の天暦五（951）年，あるいは④安和の変を契機に摂関職が常置されたので，安和二（969）年とする諸説がある．なお，平安時代の終りについての諸説は，東大寺・興福寺が焼失した治承四（1180）年，平家が滅亡した文治元（1185）年などがある．もともと時代区分については，その根拠が異なることが多いので，簡単に線引きすることが難しく，政治史と文化史および美術史との間においても，かならずしも一致するとは限らない．

図版出典　1～16のすべては，筆者撮影（撮影年は図版に併記）

1．ホキ石仏第２群第１龕　九体阿弥陀群　修復前（1976年）

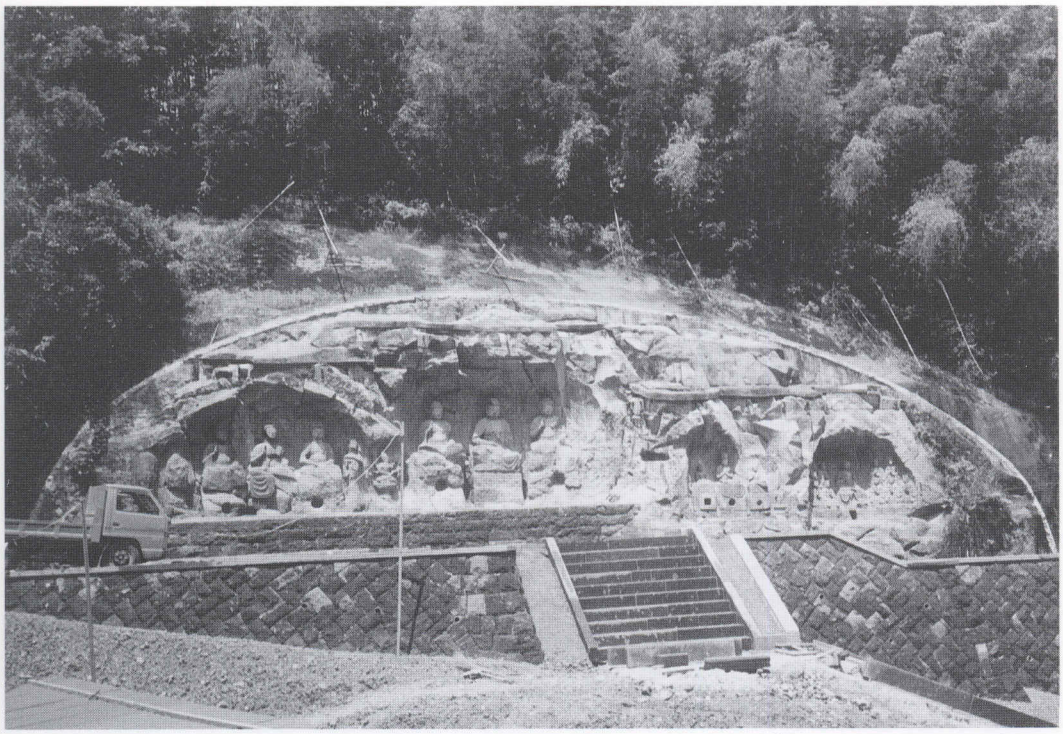


2．ホキ石仏第２群第１龕　九体阿弥陀群　修復後（1991年）



3．ホキ石仏第２群　修復前（1976年）

4．ホキ石仏第２群第２龕　阿弥陀三尊像　修復前（1976年）

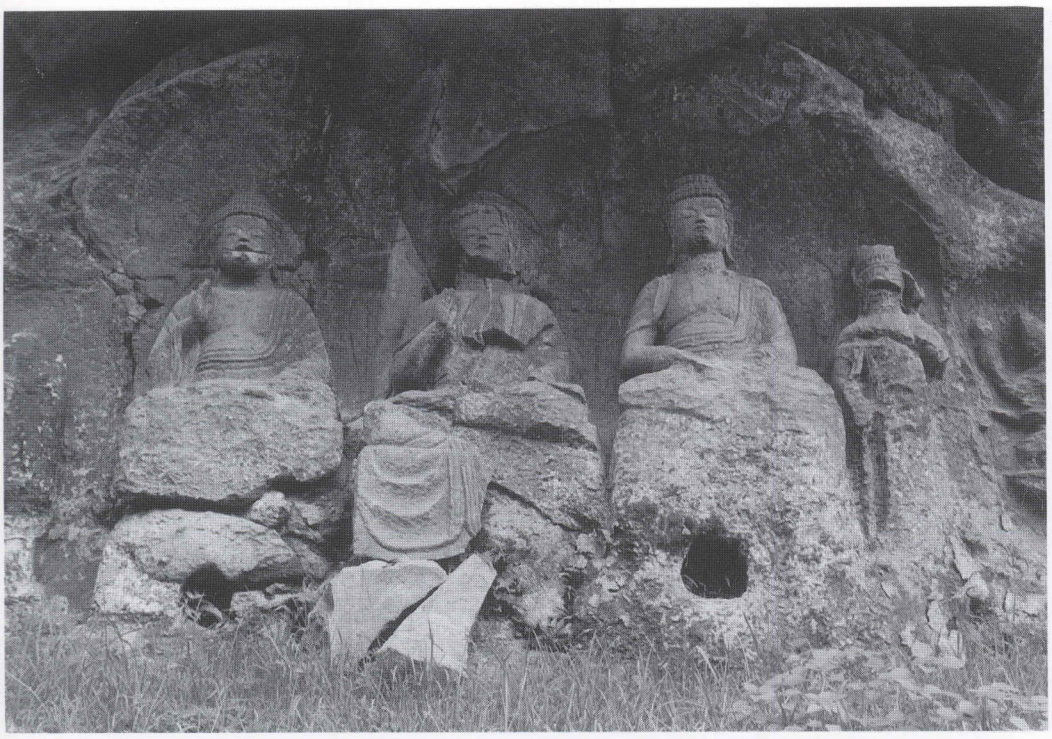


5．ホキ石仏第１群全景　修復中（1991年５月）

6．ホキ石仏第１群第４龕　地蔵・十王像　修復前（1985年）

7．ホキ石仏第１群第３龕　中尊大日・両脇如来・菩薩像　修復前（1985年）

8．ホキ石仏第１群第２龕　中尊定印如来・両脇如来像　修復前（1985年）

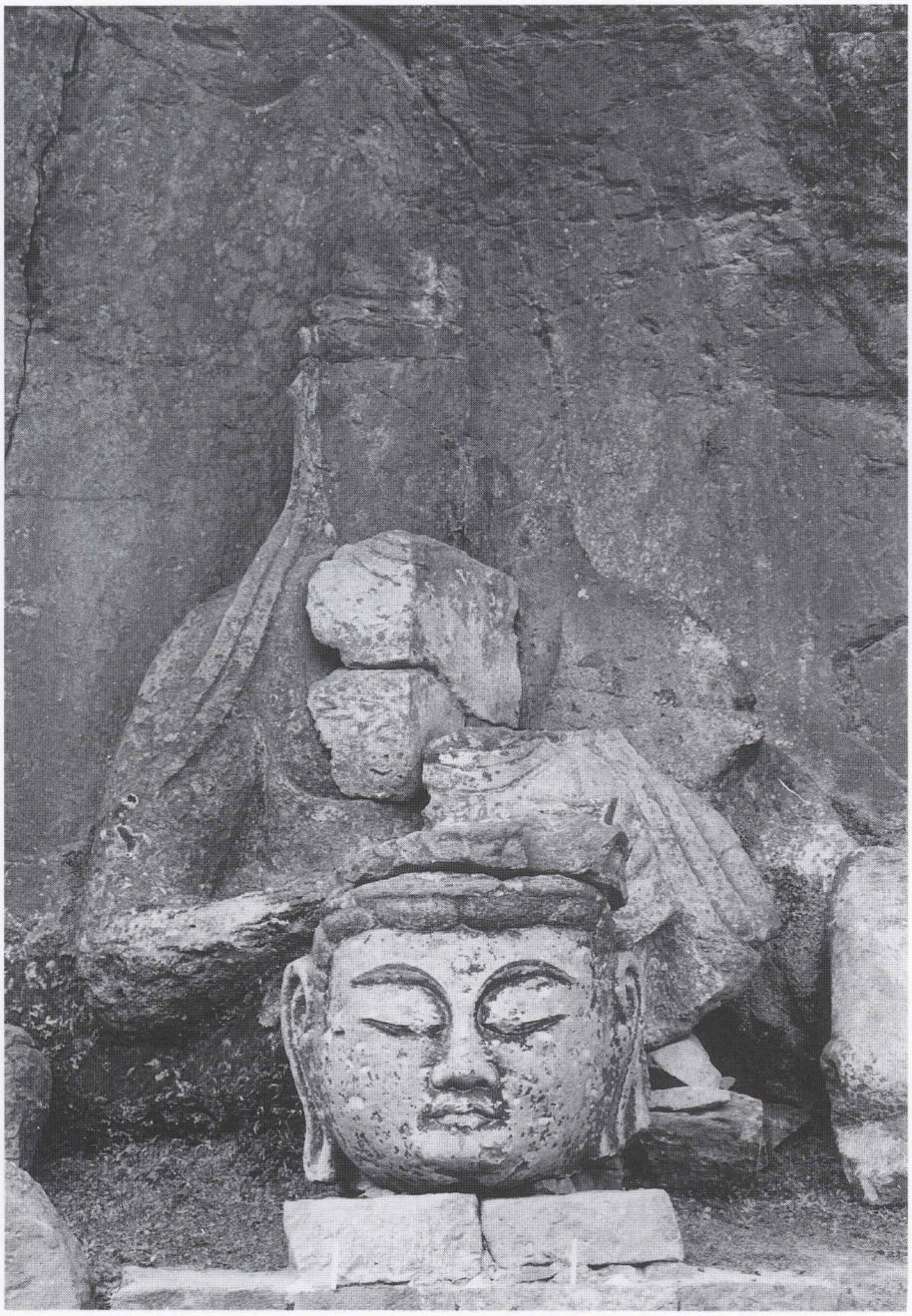


9．ホキ石仏第１群第１龕　如来三尊・両脇菩薩像　修復前（1985年）

10．山王石仏　如来三尊像（正面）　修復前（1976年）

11．山王石仏　如来三尊像(右側から)　修復前（1976年）

12．古園石仏群全景　修復前（1976年）



13．古園石仏群　中尊大日坐像　修復前（1976年）

14．古園石仏群西側　仁王像　修復前（1985年）

15．中尾五輪塔　嘉応弐（1170）年銘（奥）
承安二（1172）年銘（手前）
（1985年）

16．満月寺・日吉宝篋印塔　鎌倉時代（1985年撮影）